成蹊大学図書館蔵貴重書 解説目録
（4）Pierre Petitmengin 氏からの寄贈書：
『プルタルコス全集』初版本（1572年 H. ステファヌス刊行）

細　井　敦　子
平　田　　眞
成蹊大学図書館

Rare Books Section of the Seikei University Library
Annotated Catalogue 4 : Sur le don de Monsieur Pierre Petitmengin :
Plutarchi Chæronensis quæ extant opera, Anno MDLXXII, exc. Henr. Stephanus

はじめに

成蹊大学図書館は、フランスの古典研究者で、長らくEcole Normale Supérieureの図書館長（Directeur de la bibliothèque générale）を務められたピエール・プチマンジャン氏（2022年6月逝去）から、標記の書物：1572年刊行のステファヌス版『プルタルコス全集』（ギリシャ語原文6巻）の寄贈を受け、2022年12月8日に、森雄一学長、渡邉知行図書館長、見城武秀文学部長、濱田佳通事務部長、図書館事務室から細本有理子事務長、斎藤美幸・三宅国嗣・齋藤徳之・園部裕元の四主査、および寄贈書の予備的な調査にあたった平田・細井が集い、寄贈者の遺影を前に、正式に受領した。そのいわば中継者としての立場から、ここに「貴重書解説目録」の一環として、寄贈の由来と寄贈書の概略とをまとめて報告する。

Ⅰ．寄贈者について

寄贈者：Monsieur Pierre Petitmengin［ピエール・プチマンジャン氏］（1936～2022）。Agrégé des Lettres classiques古典語［ギ・ラ・仏］高等教育教授資格者、ENS名誉教授。［古典学とくにラテン語。AD2世紀のラテン教父テルトゥリアヌスTertullianus研究、ヴァチカン教皇庁図書館の歴史研究など］。

Directeur de la Bibliothèque générale de l'Ecole Normale Supérieure（Rue d'Ulm, Paris）.
＜エコール・ノルマル・シュペリユール＞[1]図書館館長（1964～2001）。

氏の論考『図書館を通して見るエコール・ノルマル・シュペリユールの歴史』は、P. 夫人に

よる日本語訳が、国立国会図書館（永田町）の目録にある：「Pierre Petitmengin／松崎碩子訳：<Z21-991>『日仏図書館情報研究』24（1998）p.34 ～ 50.

Ⅱ．寄贈者と本学図書館との関わり

筆者（細井敦子・元文学部教授）は、1981 年４月から 1982 年３月までの「昭和 56 年度在外研究・長期」（主な滞在地はパリ、研究機関はフランス国立図書館西洋写本部門他）の期間に、ウルム街の ENS 図書館で Petitmengin 氏の知遇をえた。関心分野（ギリシャ・ラテン古典）が近かったためもあって、共通の仏・英の友人知人を交えての交流も度々あった。

帰国してからも氏との文通は続いて、1990 年代後半（1997 年夏と記憶するが）に夫人[2]とともに来日された折には、成蹊大学図書館（旧館）にもお二人で来館された。司書の高橋郁子さんが案内役をして下さって、「有能な司書に案内されて」と喜ばれた。その後も、こちらから紀要論文などの抜刷を送ると必ず親切なコメントが送られてきて、とくに『アリストファネス喜劇九作品集』初版本（1498 年ヴェネツィアで刊行、2004 年秋に本学図書館に入る）の解説に始まる、文学部紀要に連載した（41, 42, 43, 46 号：2006 ～ 2008, 2011 年）『細井・平田・成蹊大学図書館：成蹊大学図書館蔵貴重書 解説目録』に興味を示され、たびたび有益な助言や適切な関連資料を送って下さった。「よく成蹊大学図書館訪問のことを思い出す。『*Studi e Testi*』［ヴァチカン教皇庁図書館発行の学術誌］が書架に並んでいるのも印象的だった。ENS の図書館でも近く入れるつもりでいるが」という手紙をいただいたこともある。

『プルタルコス全集』初版本のうちの第１部第２部計６巻（＝ギリシャ語原文部分）が、パリ近郊にお住まいの Petitmengin 氏から東京の細井宛に郵送で送られてきたのは、上のような経緯を経てのことであった。「歳とともに自分の興味の中心が［ギリシャよりも］ラテンのほうに傾くので、これはそちらに譲りたい。いつか成蹊大学図書館に入れてもらえたら嬉しい」というメッセージがついていた（迂闊なことにそのときの手紙が今見つからないので、年月日等不詳）。私のほうでは、折返しお礼状をお送りし文通も続いていたものの、自分の目先の仕事に追われて図書館への手続きが遅れているうちに、本年（2022 年）夏に思いがけず氏の訃報に接することとなり、本は「遺贈」になってしまった。私の不手際ゆえの遅延をお詫びするとともに、あらためて Petitmengin 氏に、永年の友情と成蹊大学図書館訪問との記念としてこのプルタルコスを寄贈してくださったことへの深い感謝を捧げたい。（AH. 2022.12.08.）

Ⅲ．寄贈本について

１）作者と刊本：ローマ時代の思想家・伝記作者プルタルコス*（プルターク）

Πλουτάρχος, Plutarchus（AD50 頃生、AD120 以後没）の著作「全集」初版本（editio princeps）、

Henricus Stephanus（=Henri Estienne）1572年刊行**、ギリシャ語原文６巻：

『小品集：倫理論集／モラリア』３巻＋『対比列伝：英雄伝／列伝』３巻。

*著者（Pl. と略記）はギリシャ中部ボイオチア地方カイロネイアの旧家の出身。ここは北方マケドニア王国のフィリッポス２世が、息子（後のアレクサンドロス大王）と共に、都市国家アテネ・テーベ連合軍を破って全ギリシャを制圧した「カイロネイアの戦い」（BC338）の戦場であった。Pl. は若い頃アテネでプラトン派哲学者に学び、また何年かローマに滞在して友人も多くローマの市民権も得たが、執筆活動の拠点は出身地にあり、隣接するフォキス地方のデルフィでアポロン神殿（神託で知られる古代版・国際交流情報センター）の祭司職も勤めた。

**ステファヌス（＝エスティエンヌ）家は16～17世紀フランスの「学匠印刷者」一族。とくにこのアンリII世（1528-98）の、ギ・ラ古典のテクスト校訂を意識した印刷出版は、後世への影響が大きい。かれはこの『プルタルコス全集』印行後の同じ年に、現代でもそれを超える類書は無いとされる『ギリシャ語宝典（*Thesaurus Graecae Linguae*）』も出しており、本学図書館（４F北洋書参考、図書館請求記号483/３/１～９）にはその写真製版復刻版（Graz 1954, repr. of 1831～65）がある。なお、本学図書館蔵のアンリ・ステファヌス版本は、他に１点：古代ギリシャの歴史家・伝記作者クセノフォン（BC355年頃没）の『伝存全作品集』1561年［推定刊行地：ジュネーヴ］のフォリオ判（第１部ギリシャ語原文と第２部ラテン語訳との合冊１巻、請求記号：888.3/3 資料ID：0080203088）がある[3]。

２）体裁：第１部 *Opuscula* Tom.1 ～Tom.3 ＋ 第２部 *Vitæ* Tom.1 ～Tom.3.

（２部６巻共通）：In-8° 178/175 × 115mm.　本文面：135 × 65mm. １頁32行。各章の始めにオーナメント、飾り頭文字。

折丁構成（校合式）：第１部第１巻を例示すると：

＊ ^{8} a— i^{8} k—u^{8} x—z^{8} A—I^{8} K—T^{8} V^{8} X^{8}—Z^{8} Aa—Cc^{8}.

（第１巻最終折丁の巻末３紙葉は白紙）

全巻とも原則として１折丁８紙葉16頁、各折丁末に捕語あり。

頁数：第１部（３巻）と第２部（３巻）はそれぞれ通し頁が上隅に付されている。

第１部＝ 16＊＋１～778；779～1386；2＋1389～2101.（*標題紙・目次。）

第２部＝ 1＊～580；2＋583～1213＋3；1217＊～1923.（*1および1217：簡略標題紙）

装訂：「画像写真で見る限り、マーブル模様薄茶色の紙表紙は18世紀末から19世紀。ただし、背表紙の仔牛革の装丁はおそらく17世紀であり、そこに貼付された濃茶色の地に金文字のタイトルラベルは18世紀に追加されたものであろう。おそらく17世紀頃に装訂された革表紙が壊れたので、後に新しい紙表紙と取り換えられたもの。」（雪嶋宏一早大教授[4]（西洋書誌学）の2022.8.02付メイルによる）。

なお本書中に書込みはないが、第１部第１巻巻初の見返し第２紙葉表に書込みあり：

＜ 1829 |1572| 257 ＞［1829 年から刊行年を引き算して「今から 257 年前に刊行された本」の意か］を書込んだ旧蔵者は 1829 年頃の人と推定される。３人（？）の旧蔵者によるイタリア語 10 行の書込みは、＜ Per la sua...raro assai...Catina. ＞ のように読める部分は、本の贈り主からのメッセージかと思われ、また「N.294」のあとの３行は「（この本は）かの偉大なる H. Stephanus による、最も正確な版の一つである」等のメモであるが、未解明部分が残っている。

３）標題紙（図版１）

第１部第１巻の標題紙：*Opuscula* Tom.1 最初の折丁第１紙葉（fol. ＊ i recto）.

ギリシャ語タイトル：ΠΛΟΥΤΑ΄ΡΧΟΥ ΧΑΙ- | ρωνέως τὰ σωζόμενα συγ-|γράμματα.

ラテン語タイトル：PLVTARCHI CHÆ- | ronensis quæ extant opera, |

Cum Latina interpretatione.

和訳『カイロネイアの人プルタルコスの伝存作品集、ラテン語訳つき』

Ex vetustis codicibus plurima nunc primum emendata sunt, vt ex HENR. STEPHANI Annotationibus intelliges: quibus & suam quorundam libellorum interpretationem adiunxit.

和訳「今回初めて、複数の古写本によって多くの訂正がなされているが、それは、ヘンリクス・ステファヌスによる注部分*から読み取れよう：注及び複数の著作から採った解釈も付加してある。」［*当全集の最後に付されていた第 13 巻を指す］

AEMILII PROBI DE VITA excellentium imperatorum liber.

「好敵手による、傑出せる皇帝たちの生涯についての書」

［「プルタルコスを、前１世紀の伝記作者 Cornelius Nepos の好敵手として」との解釈（A.A. Renouard, ***Annales de l'imprimerie des Estienne***, p.134）による。］

［ここに＜ Noli altum sapere ＞の銘入りの printer's mark　が入る*］

ANNO M. D. LXXII, excudebat Henr. Stephanus.

「1572 年、ヘンリクス・ステファヌス印行」

［刊行地の記載は無いが、［Genève］と推定されている**］

CVM PRIVILEGIO CAES. MAIESTATIS, ET CHRISTIANISS. GALLIARVM REGIS.

「皇帝陛下にして最高のキリスト者たる、ガリアびとの王による出版特認取得済」

標題紙裏：Exemplaria privilegiorum quae huic Plutarchi editioni sunt concessa inuentes in calce tomi tertij opusculorum Latine redditorum.［出版特許がラテン語訳３巻にも与えられていることを記述］

*刊行者の printer's mark「何本かの枝を伐り落とされたオリーヴ樹と傍らに立つ男性」は、この書物を刊行した Henricus Stephanus（=Henri Estienne アンリ・エスティエンヌ（1528/31

～98）が、父ロベール・エスティエンヌ（1503～59）から受け継いだ商標。銘句＜Noli altum sapere＞「高みを知ろうとする勿れ」の出典は新約聖書「使徒パウロからローマ人への書簡」第11章20節（*NT*, Ep. Rom.11.20）。聖書当該箇所の全原文：μὴ ὑψηλὰ φρόνει, ἀλλὰ φοβοῦ. Noli altum sapere | sed time. バルバロ・デル・コル訳『口語訳旧約新約聖書』（ドン・ボスコ社・1965）：「だから、自負することなく、むしろおそれよ」。1572年版の商標にはこの前半部分のみが引用されている。

刊行地については、［Genève］推定が定説（Chaix-Dufour-Moeckli, ***Les livres imprimés à Genève*, 1966, p.77 ）. Parisとする説（Dibdin, p. 336）もあったが、Renouard（p.376）は、刊行者アンリ・エスティエンヌがパリに印刷工房を所有していたとは考えられないとして、アンリの刊行地は、新教徒の父ロベールが工房を所有していたジュネーヴであるとした［とくに旧教勢力の強かったパリでは、1572年は「サン・バルテルミーの虐殺」の年でもあった］。

cf. Bibliothèque de Genève のURL（=Genève, Lausanne, Neuchatel 在の図書館のdatabase：http://www.ville-ge.ch/musinfo/bd/bge/gln/（早大教授雪嶋氏からの教示）。

この推定の補強材料として、今回原本の透かし模様を調べたところ、原本第1部第3巻に「トランペット」（Briquet 15997–15998, Trompette）の模様が多出し、同じ模様が第2部第2巻p.905他にも見られた。このことからも原本の料紙（少なくともその一部）は、ジュネーヴで1560年代後半に刊行された本に使われていたものと同一工房制作の紙であるといえるのではないか。Briquet 関係のURL：https://briquet-online.at/ 及び Briquetサイトの上位ディレクトリ：https://baobab.biblissima.fr/en（図書館・三宅国嗣検索）。

第1部では、本文開始に先立つ16頁中で、標題紙に続いて次の記述がある：

p.3～7：Reginaldus Ferrerius［ヴェネツィア駐在・フランス大使Arnaud du Ferrier］宛Henricus Stephanusの献辞。写本調査についての具体的な言及は無い。

p.7～8：Henri自身の、プルタルコスに向けたギ語の短詩3篇。

p.9～11：ラテン語訳プルタルコス『小品集』への、訳者W. Xylanderの序文。

p.11～12：ラテン語訳『列伝』の訳者Xylanderによる序文、***De cohibenda ira***「怒りを抑えることについて」（Steph.Tom.2, p.805）へのErasmus*による序文。

*旧蔵者による汚損焼失部分はIrigoin, p.CCXCVI[5]によって［Erasmi］と復元できた。

p.13上部13行：Henricus Stephausから読者あての短い序。

p.13～16：Catalogus opusculorum…：以下の3巻に収められたプルタルコス小品のカタログ＝第1巻～第3巻の小品題名（全79題名）とそれらの頁付を明示した総目次。

第2折丁以下は、折丁・頁ともに新しく始まる。折丁記号は各折丁の最初の頁欄外右下部に、ai～aiiii［ローマ数字表記］の形式で各折丁の前半紙葉の欄外右下、頁付は各頁欄外上部隅に記される。各折丁末尾に捕語。各小品の内容順序は上記総目次どおり。

第２部（*Vitae* Tom.1 ～Tom.3）の標題紙［第２部 *Vitae* には印行者の商標入りの標題紙は無い］

第２部：*Vitae* Tom.1 最初の折丁第１紙葉（fol. ai recto）：簡略標題 .

［商標、刊行年、刊行地、刊行者などの記載は無し］

ギリシャ語タイトル：ΠΛΟΥΤΑ΄ΡΧΟΥ | ΤΟΥ˜ ΧΑΙΡΩΝΕΏΣ|

Παράλληλα, ἢ Βίοι πα-|ράλληλοι.|

和訳：『カイロネイアの人プルタルコスの並列伝または対比伝記』

ラテン語タイトル：PLVTARCHI CHÆ-|RONENSIS PARAL-| lela, seu Vitæ pa-|rallelæ. ID EST,

|VITÆ ILLVSTRIVM| virorum, quos binos quasi |paria composuit.

和訳:『カイロネイアの人プルタルコスの並列伝または対比伝記 . すなわち傑出せる人物たちの伝記で、［ギリシャ人とローマ人の］ほぼ相並ぶ二人を［一組として］記述した』

４）『プルタルコス全集』初版本

上記「第１部の標題」が示すように、1572 年の刊行当初は、『プルタルコス全集』としてギリシャ語原文第１部『伝存作品集』（３巻）[6] ＋ 第２部『列伝』[7]（３巻）すなわちギリシャ語原文は計６巻、およびそれぞれに対応するラテン語訳が計６巻、さらに「Index général／総索引」（p.1-135）に続けて Henricus Stephanus 自身による写本吟味や当時の学者たちによる注釈なども含めた『Appendix／付録』１巻を加えて、合計 13 巻から成り、『Plut. 全集』の刊本としては初版本 <Editio Princeps> であった（Renouard p.134-135, Dibdin p.336, Irigoin p.CCXCVI-XCVII）。

今回の寄贈本は、上記『Plut. 全集』のうちのギリシャ語原文部分のすべて即ち『モラリア』３巻及び『列伝』３巻で、計６巻である。ラテン語訳部分６巻と『付録』１巻（計７巻）は無い。最終巻『付録』が含まれていないことは、本文研究の資料としては惜しまれるが、しかしこの寄贈本６巻は、古典ギリシャの作者たちの中でもきわだって作品数の多い「プルタルコス」が「小品集＋列伝」として初めてそのギリシャ語原文の全体像を印刷本の形で現わして、近現代のプルタルコス校訂版の基礎をつくったものであり、その「初版本」として高い評価に値すると考えられる。

ちなみに、『小品集／モラリア』のみの初版は 1509 年ヴェネツィアのアルド（Aldo）が刊行したフォリオ版、『列伝』のみの初版は 1517 年フィレンツェのジウンタ（Giunta）刊行のフォリオ版であった（Renouard, *Alde* p.55 , Dibdin p.341, 344）。

５）Stephanus 1572 年版の再編集

H. Estienne の没（1598）後、「1572 年のプルタルコス」は、1599 年 André Wechel（Andreas Wechelus, 1554-81）の後継者たちによって、フランクフルトで再編集／再版（réédité）され、著名なフランス人学者たち（E. Turnèbe, Jacques Bongars, Paul Petau 他）が編集に協力した（Irigoin, p.CCXCVII）。フォリオ判２巻、ギ語原文とラ語訳が同一頁に２欄組み。第１巻『列伝』（ラテン語訳は Cruserius）、第２巻『モラリア』（ラテン語訳は Xylander）で、Dibdin らの記述によ

れば、この段階でプルタルコス作品の「全集」においては、先に『列伝』を、次に『モラリア』をおくという順序が確定し、『列伝』には1572年版のSteph.による注が取り入れられている（Renouard, p.435, Dibdin, p.337-38）。『モラリア』については、この1599年版の頁付と欄の中の区分を示す大文字アルファベットとが、言及・引用のさいの万国共通記号として、これ以後のPlut.校訂版の全てに使われることになった。京大叢書などの邦訳書においても「凡例」中に言及される「Stephanus版」または「Frankfurt版」は、1599年版（本稿筆者未見）を指すであろう。この版は1620年に同地で再刷され[8]、最後の増刷はパリで1624年Antoine Estienne（1572年版を出したHenriの孫）が印刷刊行した（Irigoin p.CCXCVII）[9]。

６）書誌面に見るStephanus1572年版の問題点[10]

現在わたしたちが見るようなプルタルコスの作品の総体は、作者自身がこの形にまとめたものではない。原作者の執筆段階における各作品の配列／発表順序と全体構想の問題は、現在でもプルタルコス研究の重要課題のひとつとされる[11]が、本稿では扱わない。本稿での記述は、印刷刊本の時代に入ってから最初の「Plut.作品の総体」と考えられる「Steph.1572年版」を対象として、必要に応じてその前後の版本についても調べたところを記すにとどまる。

６－１）「ガルバとオトー」は『モラリア』・『列伝』のいづれに入るか

Stephanus1572年版においては、二人のローマ皇帝：第六代ガルバ（Galba, 在位AD 68-69）と第七代オトー（Otho, 在位AD 69. 1月－4月）は『列伝』には入っていない。かれらの話は『モラリア』の第３巻の中にp.1488-1512 : Galba, p.1513-1529 : Othoの順に入っている[12]。この順序は、1572年のStephanus版が、他の（プルタルコスの）初期刊本や近代の校訂版およびそれに依拠する翻訳書（それらはこの二人を『列伝』の最後に載せている）とは大きく異なる点であるが、これはSteph.版の乱丁ではなく、古代末期以来のプルタルコス作品全般の伝承に関わる問題である。

伝承のあらすじとしては、まず古代末期（AD4世紀頃か）の段階では、「ランプリアス（Lamprias）のカタログ」とよばれる、断片や真作偽作も含めて227点の「Plut.作品名」[13]の記録があり（Irigoin, p. CCXXVIII, 一覧表はp. CCCXI-CCCXVIII）、このカタログでは「ガルバとオトー」は、31：Γάιος Καῖσαρ［Caius Caesar］と33：Βιτέλλιο［Vitellius］との間に第32番目：Γάλβας καὶ Ὄθων として入っていた。このことはZieglerの新しい校訂版（1973年:Teubner叢書 *Vitae Parallelae*, Vol.III, Fasc. 2, Praefatio ad Vitas Galbae et Othonis, p. xv）においても指摘されている。

中世写本段階での作品集成は13世紀末の学僧Planudesによってなされた「プラヌゥデスの集成」であるが[14]、そこでは「ガルバとオトー」は『モラリア』の25番目と26番目に収められていた[15]。

他方、14世紀手写のミラノ写本Ambrosianus D 538 inf.（= gr.1000）を始めとする写本群は「ガルバとオトー」の伝記を『列伝』の最後に配置している。1517年に『列伝』の初版本を刊行したフィ

レンツェのジウンタは、このミラノ写本系統の写本を底本としてフォリオ版を出し、ヴェネツィアで 1519 年に出たアルドのフォリオ版『列伝』もこれに倣った。20 世紀の Ziegler 編纂による Teubner 叢書原文も、邦訳における岩波文庫河野與一訳も京大叢書も、この 1519 年版の順序を採用して「ガルバとオトー」を『英雄伝』の最後においている。

なお、Aldo は上述の『列伝』に先立って 1509 年に *Plutarchi opuscula.* LXXXXII（=『92 小品集／モラリア』）初版本を出していたが、そこでは、巻末に近いところに「ガルバとオトー」が置かれ、しかも「No.62 – Otho – No.63 – Galba – No.64」の順（O. と G. の年代順が逆のまま）で並べられていた（Irigoin p. CCLXXXVII-CCXCII）[16]。この作品順序では、各章の内容を考慮すると No.62「ストア派について」—「Otho」— 63「陸棲動物と水生動物」—「Galba」— 64「プラトン『ティマイオス』について」となり、内容的には関係の無い章が並んでいたわけである。Steph. は、1572 年版の編集にあたって Ald. 版の作品順序を並べ直したが、上述の「Planudes の集成」系列の伝承によったためか（cf. 注 15）、Otho と Galba を歴史上の年代順（G.—O.）に戻して、さらにこれら２章を、題材の内容を考慮して、『モラリア』中でも「十人の弁論家」・「アリストファネス」・「ヘロドトス」ら歴史上の実在の人物を扱う三つの章とまとめうる場所に移し入れて提示したのではないか [17]。それが今回の寄贈本における配列順である [18]。

そして最終的に 1599 年フランクフルトでの再編集（上述５）のさいに「ガルバとオトー」が『モラリア』から『英雄伝』の末尾へ移されたことは、1599 年版原本を調べれば確認できるであろう。

６－２）＜ *Vitae* Tom.1, p.569-572 欠＞ の問題

『英雄伝』第１巻末尾にある、共和政ローマ時代、第二次ポエニ戦争時（BC3 世紀末）のローマの将マルケルルス対カルタゴの将ハンニバルの戦いを語った章に、この問題がある。

折丁 N は、fol.Ni —［fol.Nviii］として、形は完全な８紙葉１折丁をなしている（p.568-[569] の見開き中央に綴じ糸あり）が、p.568（末尾語は ἄνα-）の見開きの右頁では 569 となるべき頁付が 571 となっており、当然ながら左頁（p.568）の末尾語は、p.571 の最初の語 ἀφεῖναι には結びつかない。そして、欠如分は次巻 Tom.2 のほうに、p.586 に続いて 571-572, 569-570 という、これも順序が逆になった形で挟み込まれ、Tom.2, p.570 の見開きの頁付は p.587 になっている。folio 判とされる「原稿としての元の本」の各ページを、octavo 判でどう配置するか、その段階で混乱があったのではないかと思われるが、それ以上に立ち入ることは困難である。

６－３）欄外数字について

Stephanus 1572 年版の『モラリア』３巻と『英雄伝』３巻計６巻には、いづれの巻でも、欄外小口側に小さく印刷された数字のある頁が、巻初から巻末まで数頁の間隔をおいて出てくる。印字されているのは算用数字のみであり、並び方からみて「テクスト内の段落の表示」ではない [19] ことは明らかである。原本全６巻について、初出から巻末まで全頁の欄外数字を順次拾い出して、数

字の並びが何を示しているかについて調べたところを、まず比較的単純な『英雄伝』から始めて記したい。

６－３－１）『英雄伝』の場合

第１巻：冒頭 p.3, 第１行目に「欄外数字１」があり、その後は、大体規則的に５、６頁間隔で（但し次に来るべき「２」は印字脱落）、欄外数字が「３」（p.14）から「101」（p.575）まで連続して付されていて[20]、そこに数字の「飛躍／非連続」は無い。第１巻の巻末は p.579 である。これを図式化すると次のようになる：

Stephanus p.3 ～ 575 ――　欄外数字：１～ 101.

第２巻：冒頭 p.583 に欄外数字 102 があり、その後は、大体規則的に５、６頁間隔での欄外数字 107（p.612）まで。しかしその３頁後の p.615 では欄外数字が「飛躍」して 248 となり、その続きは欄外数字 254（p.649）まで。その後 p.663 までは欄外数字は無く、次の欄外数字は p.664 に出るが、逆戻りで 121。そして p.669 の 122 以下、巻末に近い p.1209 の 217 まで続く。第２巻巻末は p.1213 である。即ち：

Stephanus p.583 ～ 612　――　欄外数字 : 102 ～ 107

Stephanus p.615 ～ 649　――　欄外数字 : 248 ～ 254

Stephanus p.664 ～ 1209　――　欄外数字 : 121 ～ 217.

ここでは、Aristeides の記述（St.p.583 ～ 614）中に欄外数字 107 があるが、次の「カトー」が始まるところ（p.615）の欄外数字は 248. 254 のあとは p.663 まで欄外数字が無く、Philopoimen の記述（p.652 ～ 674）中の p.664 で欄外数字 121 が出る。

第３巻：冒頭 p.1219: 欄外数字 218. その後は p.1387 の欄外数字 247 まで大体規則的に５、６頁間隔で。しかし次の欄外数字は p.1396 の「108」で、それは「118」（p.1453）まで連続するが、118 の次にくる欄外数字は「255」（p.1461）（第３巻巻末は p.1923）. 即ち：

Stephanus p.1219 ～ 1387　――　欄外数字 : 218 ～ 247

Stephanus p.1396 ～ 1453　――　欄外数字 : 108 ～ 118

Stephanus p.1461 ～ 1746　――　欄外数字 : 255 ～ 304

Stephanus p.1753 ～ 1848　――　欄外数字 : 310 ～ 327

Stephanus p.1850 ～ 1873　――　欄外数字 : 305 ～ 309

Stephanus p.1880 ～ 1921　――　欄外数字 : 328 ～ 335.

このように、第３巻では欄外数字が、247|108, 118|255, 304|310, 327|305, 309|328 の５箇所で「飛躍／非連続」の形で現れるのがわかり、それは、内容的には各章の配列に関わっていることが分かった。つまり、欄外数字は、おそらく Stephanus が「元の本」として使った刊本における当該章（当該作品）の位置を記録しておくためのもので、第１巻のように[21]自分の版でも「元の本」の配列順のとおりに配列したところには欄外数字の「飛躍／非連続」はない。数字の連続が途切れている

のは、かれが配列順を変えて印刷したところなのだ、と説明できるのではないだろうか。

そのように考えると、Stephanus 1572 版第１巻では、欄外数字は１～ 101 まで飛躍なしに連続している、即ち Stephanus は「元の本」の配列順序に従っている、といえよう。そのうえで全３巻を、今度は欄外数字（１～ 335）を基準にして「元の本」の順序をみると：

１～ 101	：Stephanus p.3 ～ 575	：Theseus から Marcellus まで
102 ～ 107	：Stephanus p.583 ～ 612	：Aristeides
108 ～ 118	：Stephanus p.1396 ～ 1455	：Cato Minor「小カトー」
121 ～ 217	：Stephanus p.664 ～ 1209	：Philopoimen から Pompeius まで
218 ～ 247	：Stephanus p.1219 ～ 1387	：Alexandros, Caesar, Phocion
248 ～ 254	：Stephanus p.615 ～ 649	：Cato Major「大カトー」
255 ～ 304	：Stephanus p.1461 ～ 1746	：Agis から Antonius まで
305 ～ 309	：Stephanus p.1850 ～ 1873	：Artoxerxes［sic］
310 ～ 327	：Stephanus p.1753 ～ 1848	：Dion, Brutus
328 ～ 335	：Stephanus p.1880 ～ 1921	：Aratos

このようになる。『英雄伝』がテーセウスに始まるのは、「欄外数字が示す元の本」でも Stephanus 版でも同じであり、『英雄伝』の登場人物 48 名の顔ぶれは、「元の本」と 1572 年の Stephanus 版との間に違いはない。しかしその順序をみると、内容上は「アリステイデース」の対としての「大カトー」が入るべき位置に、「元の本」では「小カトー」が入っていた、つまり「元の本」では同名の親族である２人の「カトー」の位置が逆になっていたので、Stephanus が訂正したのであるが、その際に「元の本」のどこにその間違いがあったか（おそらくその頁付を）欄外数字として記しておいた、ということが推定されるのではないか。また、第３巻末尾に近いところでは、「アルタクセルクセース（単独）」と「ディオーンとブルートゥス（１組）」との順を、Stephanus が入れ替えたらしいことも、欄外数字の並び方から読める。『英雄伝』の最後 48 番目の人物は、Stephanus 1572 年版では「アラートス」であるが、河野訳最終冊（十二）の本文や京大叢書では「アルタクセルクセース」であって、こちらは「1519 年のアルドゥス版以来」の順である、という [22]。なお、Steph. 1572 年版では「ガルバとオトー」は『列伝』ではなく『モラリア』のほうに入っている。この問題については前項６-１）で記述した。

『列伝』編集のさいに Steph.1572 版の「元になった本」は何か。Renouard（*Annales de l'imprimerie des Alde,* p.87）によれば、「Ald. 1519 年版の『列伝』は、フォリオ判・同刊記で２度印行されたといわれていて、<Aldina I[a]> は Giunta1517（『列伝』初版本）に倣ってつくられたと考えられる。<Aldina II[a]> のほうは、テクスト本文も、Giunta 初版本よりも洗練・改良されていて、のちの Basel 版（1533 年 Froben 印行）や H. Estienne 版（1572 年 Stephanus 印行）、その他諸版の基盤になったものである」とのこと。しかし私たちの Steph.1572 年版の「元の本」については、欄外数字との関連も考慮すると、現段階では明確な推定ができない。

６－３－２）『モラリア』の場合

前項と同様の調査を、Stephanus 1572年版『小品集／モラリア』の欄外数字についても行っているが、『モラリア』は謂わば短編の随筆集で、作品の数は76、頁数も通し頁で2101頁と多く、詳細な調査は、現在、p.1837（即ち第３巻・作品番号66）あたりまでにとどまっている。全体としての報告は、1572年版の書誌報告の続きとして次の機会に譲るとして、ここでは、これまでの調査の概略とそこから得られる見通しとを述べることにしたい。

『列伝』の場合も同じであるが、欄外数字の調査は、調査対象としての初期刊本はStephanus 1572版のみを持っている私たちの、「Steph.1572年版のこれらの欄外数字は何を意味するのだろうか」という、きわめて初歩的な疑問から始まっている。ただ、『モラリア』に関しては、古代末期のカタログから20世紀の代表的な校訂本叢書に至る伝承史が、先にも言及したが、手近なところ即ちBudé叢書の ***Plutarque Œuvres Morales***, Tome 1, 1re partie : Introduction générale（1987）中のJ.Irigoinによる “Histoire du texte des ＜ ŒUVRES MORALES ＞ de Plutarque（p. CCXXVII-CCCXXIV）” にあり（Steph. 1572年版の欄外数字への言及はまったく無いが）、Aldo初版と［1572年版に始まって1599年版で確定した］Stephanus版との作品配列順序についての解説、Aldo版の基になったミラノ写本[23]やPlanudes集成との関連も含めた記述、簡明な対照表等があるので、私たちの調査の結果がそれと合致するか否かを確かめることができる。

『モラリア』での欄外数字は、『列伝』と同様ほぼ規則的に、ただし『列伝』での間隔が５、６頁ごとであったのに対して、こちらでは大体２、３頁の間隔で、欄外小口側に記されている。ここから、Stepahnus の見ていた「元の本」が、『列伝』の場合と『モラリア』のそれとでは、判型や組み方に違いのある、異なるものだったのではないか、と考えられる[24]。

調べる過程で、各作品が変わっても欄外数字の連続性は変わらない、という例は、『列伝』第１巻と同様の現象が『モラリア』においてもみられる。

第１巻の冒頭p.3, 第１行目に欄外数字「２」があり、その後は、大体規則的に２、３頁間隔で、欄外数字が「３」（p.5）から「231」（p.468）まで連続して付されていて、数字の「飛躍／非連続」は無い。内容面からも、Stephanus版は、「作品番号１：子供の教育 Περὶ παίδων ἀγωγῆς」から「17：女性の徳（Γυναικῶν ἀρεταί）」まではAldoの『モラリア』初版本（1509年）の配列順を引き継いでいる（Irigoin, p.CCLXXXVIII）のが肯ける。しかし「231」の次にくる欄外数字は「235」（p.471）で、ここは非連続であり、「231」に続くべき「232」は『モラリア』第３巻p.1761「作品番号62：水と火ではどちらがより有益か（.. πότερον ὕδωρ ἢ πῦρ..）」の欄外数字になっている。欄外数字の順序は、Stephanusが使った「元の本」における作品順序である、という『列伝』での私たちの結論をここにも適用すれば、「元の本」では「62: 水と火・・」は「17: 女性の徳」の次にあった、それをStephanusが、おそらく内容上の近さを考慮して「作品番号59：自然学的諸問題（Αἰτίαι φυσικαὶ）［sic］」に始まる一連の作品の中の「61: 冷の原理 Περὶ τοῦ πρώτου ψυχροῦ」につづく位置

に移した、と解釈できよう。そして「Aldo 18 : Planudes 20 : Stephanus 62」という対照表（Irigoin p. CCLXXXIX）を考え合わせると、「元の本」は Aldo 1509 年初版本であった、といえるのではないか[25]。

このような、欄外数字の「飛躍／非連続」は、271|344, 354|516, …等々、これまで調べただけでも 30 数箇所あり、全体としては Irigoin の対照表（p. CCLXXXIX-CCXCI）から理解される「Steph.1572 版は Ald.1509 版の順序を、50 箇所ほどで[26]変更している」という結果に合致するであろうと予測される。

Ⅳ．Plutarchus 作品：『英雄伝』と『モラリア／倫理論集』について

プルタルコス（AD50 年頃生～ 120 年代没）は、最盛期に向かうローマ帝国の支配下にあるギリシャ（自治都市）の作家であり、紀元前７～６世紀頃のホメロスに始まるギリシャ古典文学史の上では最後期の作家になる。彼の『英雄伝』は、傑出した人物をギリシャとローマから時代を超えて一人づつ選んで 22 組[27]として記述する「並列伝記・Vitæ paralleræ」で、それに続けて、各章の記述のまとめとして二人（一対）を比較する「syncrisis」の一節を付加する、という形を原則としている（図版３）。

記述にあたっての作者の基本的な態度は、第 17 番目の「アレクサンドロスとカエサル」の冒頭に示される（図版２）。プルタルコスはそこで、取扱う事績が多いので有名な事柄は要約して伝える、と述べ、自分が書くのは「歴史［historia の複数］ではなく伝記［bios「生、生き方」の複数］（むしろ「言行録」と訳すか）であって、それは、著名な事蹟の中には必ずしも徳や不徳が現れず、ちょっとした行動や言葉や戯れの方がしばしば、何千と屍を作る戦闘や大規模な布陣や町々の攻囲よりも、その人物の性格を明らかにするからである。［中略］大事業や闘争の事は他の人々に委せて、［私は、人物の］心の特徴に立入り、それによって各人の生（むしろ「言行」）を描き出そうと思う」（引用部分は河野訳岩波文庫（九）p.7 による）と書いている。アレクサンドロス大王にまつわる逸話も、その多くはここから出て広く世間に知られており、また一例としてカエサル（Julius Caesar）やブルートゥスの章にある、英雄とその妻との対話の場面は、プルタルコスの記述が殆どそのままシェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』に活かされている。『アントニーとクレオパトラ』、『コリオレーナス』など一連の「ローマ史劇」とよばれるものも同様であろう。

もう一方の、1572 年版では背表紙短縮標題 *Opuscula*『小品集』として第１部にまとめられている 76 編の作品は、全３巻で 2101 頁のもので（京大叢書の日本語訳では全 14 巻）、『モラリア』／『倫理論集』の名で知られている。内容としては、目次をざっと見るだけでも、「子供の教育について」「怒りを抑えることについて」「兄弟愛について」などから「借金をしてはならないこと」、「老人は政治活動をすべきか」「政治家になるための教訓集」、あるいは食卓での話題として「宴会の席で哲学的議論をしてよいか」、「我々は、俳優が怒り苦しみ悲しむ役を演じるのを見て楽しむが、実際に

人々が苦しんでいるのを見聞きするのは楽しくない、これはなぜか」、「尋ねられると嬉しい質問とはどういう質問か」等々、人と人との関係の中でおこりうる様々な問題をとりあげて語る倫理的考察が大多数である。語り口は親しみやすいが、ギリシャ・ローマの神話伝説から、周囲に生きる同時代の文人たちの作品や言動までも、すべて呑み込んだ巨人のような著者の博識と度量に、読者は圧倒されることもしばしばである。また「自然学的諸問題」としてまとめられた論考や「プラトン哲学に関する諸問題」など哲学的な考察も十数篇入っている。

しかもこれらはみな、著者自身が執筆した時から残していたものがそのままの内容と順序で伝存しているわけではない。プルタルコスの名の下にばらばらの形で伝存した作品の転写本を集めて順序を整え、本の形に編集して、印刷発行したのが、ヴェネツィアの Aldo（1509年『モラリア』初版）や、フィレンツェの Giunta（1517年『列伝』初版）、そして今ここに寄贈された Stephanus（1572年『全集』初版）と、その改訂版（1599年）の編集に代表される、ルネッサンス時代の、学者であり印刷者でもあった人々である。毀誉褒貶はつきものであるが、かれらの仕事の蓄積と継続があったからこそ、その後の校訂も翻訳も可能になって、原著者から二千年も後の私たちまでも、プルタルコスのいきいきした人物描写にひきこまれたり、ときにはその辛辣な人間観察に苦笑させられたりしながら作品を読み、あらためて自分の周囲をゆっくりと、おそらく今までとは少し異なる角度から、眺めなおすことができる。本稿筆者たちも、自分の狭い守備範囲にはとても入りきれないプルタルコスの、そのステファヌス版全集原本の調査に関わってみて、いま、過去の遺産のありがたさとその重さとに圧倒されている。（AM2H.2022.12.31.）

本稿中に頻出する参照文献のフルタイトル：

Dibdin, Th. F., *An Introduction to the knowledge of rare and valuable editions of the Greek and Latin classics,* London 1827

Renouard, A.A., *Annales de l'imprimerie des Alde. Histoire des Trois Manuce et de leurs éditions,* Delaware, 2003（repr. of 1834[3], Paris）（2nd ed. 1825）

Renouard, A.A., *Annales de l'imprimerie des Estienne ou Histoire de la famille des Estienne et de ses éditions,* Genève 1971（repr. of 1843, Paris）

＊プルタルコス作品原文からの日本語全訳は：

『プルターク　英雄伝』全12冊、河野与一訳、岩波文庫（1952～1956）

『英雄伝』全6巻、京都大学学術出版会（2007～2021）

『モラリア』全14巻、京都大学学術出版会（1997～2018）.

＊『英雄伝』『モラリア』からの抄訳は、岩波文庫やちくま学芸文庫から複数出版されている。

注

1　「ENS」の訳語として辞書には「高等師範学校」があるが、日仏の学校制度は大きく異なるため、この訳語は不適切で、ENS またはカタカナ書きで表示するほうがよいと考える。

2　本学図書館蔵の２点：共編著書『両大戦間の日仏文化交流　別巻』（ゆまに書房・2015）および訳書『クレッ

トマン日記―若きフランス士官の見た明治初年の日本』「東洋文庫シリーズ」（平凡社・2019）は、P. 夫人松崎碩子氏（故人）の著作である。

3　細井・平田・成蹊大学図書館「成蹊大学図書館蔵貴重書　解説目録」（１）西洋古典の初期刊本」in『成蹊大学文学部紀要 41 号』p.70 ～ 77.

4　成蹊大学図書館蔵のアルド版図書６点は、同氏の「我が国におけるアルド版の調査研究」in『早稲田大学図書館紀要』第 54 号（2007）にも挙げられている。

5　J. Irigoin, ***Plutarque,Œuvres morales,*** p.CCXXVII-CCCXXIV: Histoire du Texte（Budé 叢書 1987）.

6　『随想録／倫理論集／モラリア』と訳される。背表紙の短縮題名は「PLUTARCHI |OPERA GRECE」『OPUSCOLA| TOM. １~３ 』（『プルタルコスのギリシャ語作品／小品集１～３巻』）。

7　『英雄伝／列伝／英雄列伝』と訳される。背表紙の短縮題名は上と同様「PLUTARCHI |OPERA GRECE」『VITAE | TOM. １~３』（『プルタルコスのギリシャ語作品／伝記１～３巻』）。［表記はいづれも背表紙印字のママとする］。なお本稿では、『小品集』／『モラリア』、『列伝』／『英雄伝』の各２通りの訳語を使用している。

8　京大叢書『英雄伝』第１巻凡例の「17 世紀のフランクフルト版」はこの 1620 年再刷を指すであろう。

9　J. Irigoin 上掲注５。近年のものでは「刊本の伝承史研究」として論文:S. M. Tempesta, <Stemmata editionum and the birth of the so-called vulgates of Greek texts（Plato, Plutarque and Isocrates）（***Publication de l'Ecole nationale des chartes***, 2014, p.37-54）> https://books.openedition.org/enc/3467 を参照した（2022.11.06 閲覧）。Irigoin も Tempesta もフランクフルト刊行の 1599 年版を「Stephanus 1572 年版の再版」としている。

10　なお以下の記述において、K. Ziegler, Plutarchos, ***RE*** 22.1.636-962（rev. separate repr. 1964）は、今回参照する余裕がなかった。

11　近年のプルタルコス研究の動向と作品発表順序の問題については、小池登・佐藤昇・木原志乃編著『『英雄伝』の挑戦―あらたなプルタルコス像に迫る』（京都大学学術出版会・2019）の、とくに序章および第９章を参照。

12　筆者が原本を調べ得たのは、寄贈本（Stephanus 1572 年版）のみである。中世写本伝承や他の 16 世紀刊本についての資料は、上記の Irigoin による記述のほかにも、Teubner 叢書の校訂者 K. Ziegler や Budé 叢書（1964）の R. Flacelière -E. Chambry -M. Juneaux（***Plutarque Vies, Tome*** 1, p.XXXII-LV）があるが、本報告段階では調査未完了。

13　この「カタログ」（Irigoin, p.CCCXI - CCCXVIII: ΠΛΟΥΤΑΡΧΟΥ ΒΙΒΛΙΩΝ ΠΙΝΑΞ）では『列伝』と『モラリア』との間に区分はない。個人名をタイトルにした作品はすべて一覧表の番号１~40 に集められている。

14　現存写本としては 15 世紀後半手写のウィーン写本２点に伝存する（Irigoin, p.CCLXVI-CCLXVII）。

15　Ziegler は、ガルバとオト―の伝記への序文の中で、Stephanus はこの系統の伝承に従っている、とした（K.Ziegler, ***PLUTARCHI VITAE　PARALLELAE***　Vol.III・Fasc.2, 1973）. Cf. Irigoin, p. ccxc.

16　他の 19 編の作品とともに < la fin du volume, de la p.642 à la p.1050 >を占めていた、とある。この初版本に含まれる「小品」の数や内容については、Irigoin の説明を参照。

17　これはまた、この項の冒頭で言及した「ランプリアスのカタログ」の配列順にも共有される考え方といえる。この「Lamprias のカタログ」では No.1~40 はすべて歴史上の人物を章題にしており、No.40 Aratos に続く No.41 は「十人の弁論家の生涯」となっていた（Irigoin 上記注 13）。

18　Stephanus が Aldo 版の作品順を入れ替えたことは、次項６-３）に述べる欄外数字の並び方からも推定できる。

19　『モラリア』翻訳書の「凡例」中にしばしば言及される「（各作品中の）段落を示す大文字アルファベット」は、1599 年の再版時に入れられたものであろう（上述 III-5）。Stephanus1572 年版（第１部第２部計６巻）中には、ここで扱う欄外数字以外の数字や記号は見られない。

20　途中、テクストの文脈から見て明らかに単純な誤植と考えられる数字の乱れは、紙幅の都合上、本稿には記さない。以下『モラリア』についても同様。

21　いうまでもなく、これは「各章の配列順序」のみの問題であって、編者による本文字句の修正等には関係しない。

22　京大叢書第５巻・第６巻の「凡例二」による。但し河野訳（一）「解説」中の一覧表（本稿 p.116 図版３）および同（十二）p.4「プルターク英雄傳 全巻内容」では、48 番目に「アラートス」が入っている。

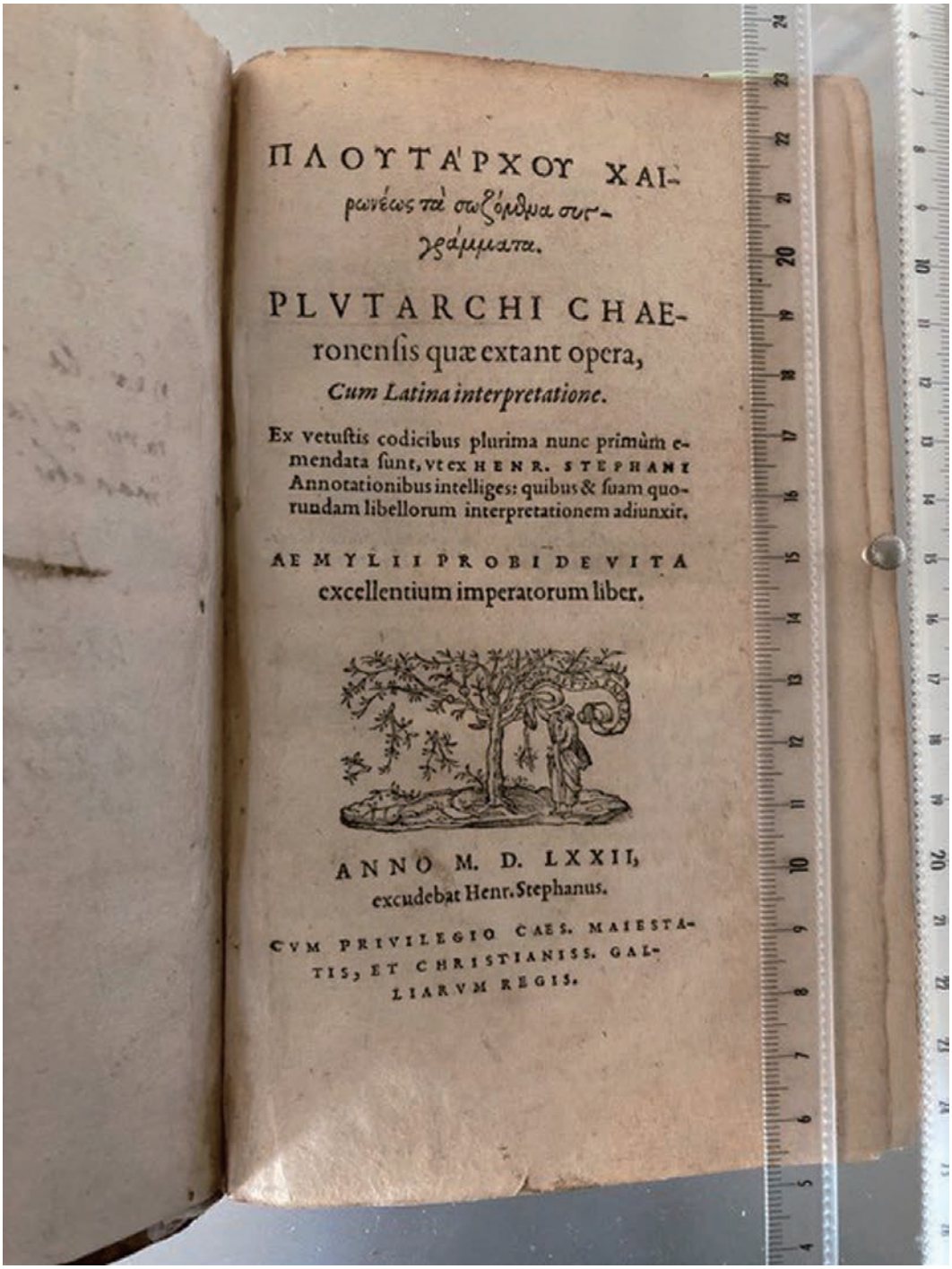
23　Ambr. C195 inf.（= gr. 881）.

24　ただし『列伝』も『モラリア』も、年代的にかれに先行した版はフォリオ判であったらしく（Dibdin, p.336, 341-345）、その上、一口にフォリオ判と言っても実際の大きさや活字の組み方などの問題もあるので、「実物」を見なければ「間隔」の違いの説明に結論を出すことはできない。

25　『モラリア』は、Ald.1509 年初版と Steph.1572 年版との間にバーゼルの Froben が Xylander の編集で 1542 年に出しているが、それは Ald. 版を手直ししたもので、Steph.1572 年版はそれをはるかに凌ぐという（***Renouard, Annales ..Estienne,*** p.134, cf. Dibdin, p.345）.

26　Ald.1509 年版と Steph.1572 年版とでは収載された作品やその数え方も同一ではないので概数となる。

27　『英雄伝』第 19 番目は２人のギリシャ（スパルタ）の王と２人のローマの政治家（グラックス兄弟）との４人一組を扱っているので、実質的には 22 組 46 人、それに巻末に単独が２人で、計 48 人。そこに Steph.1572 年版では『モラリア』に入っている２人も加えれば 50 人となる。



ΠΛΟΥΤΑΡΧΟΥ ΧΑΙ-
ρωνέως τὰ σωζόμενα συγ-
γράμματα.

PLVTARCHI CHAE-
ronenſis quæ extant opera,
Cum Latina interpretatione.

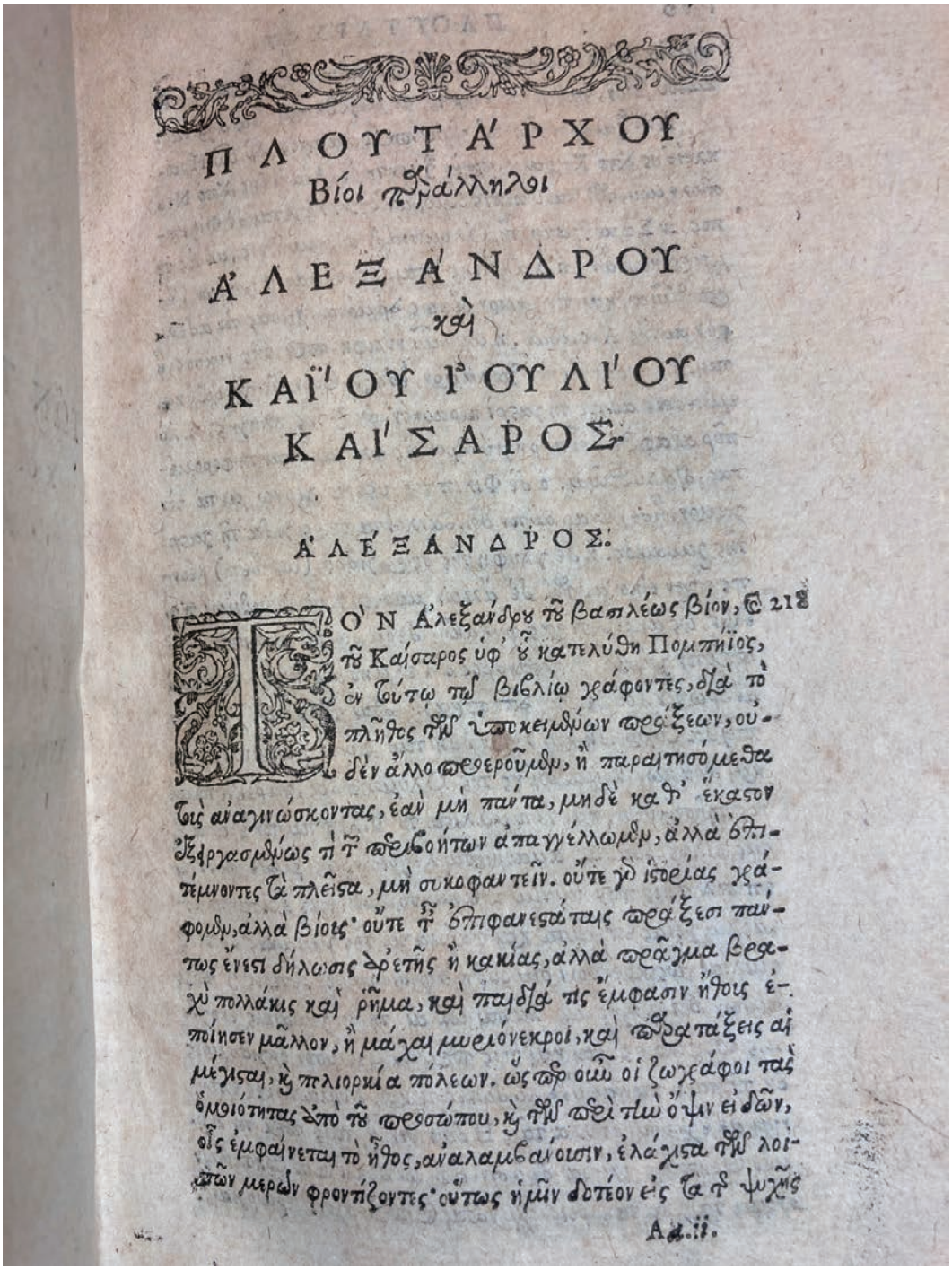
Ex vetuſtis codicibus plurima nunc primùm emendata ſunt, vt ex HENR. STEPHANI Annotationibus intelliges: quibus & ſuam quorundam libellorum interpretationem adiunxit.

AEMYLII PROBI DE VITA excellentium imperatorum liber.

ANNO M. D. LXXII,
excudebat Henr. Stephanus.

CVM PRIVILEGIO CAES. MAIESTATIS, ET CHRISTIANISS. GALLIARVM REGIS.

図版 1 ：Stephanus 1572 年版第 1 部第 1 巻、標題紙．成蹊大学図書館蔵本.



ΠΛΟΥΤΑΡΧΟΥ
Βίοι παράλληλοι

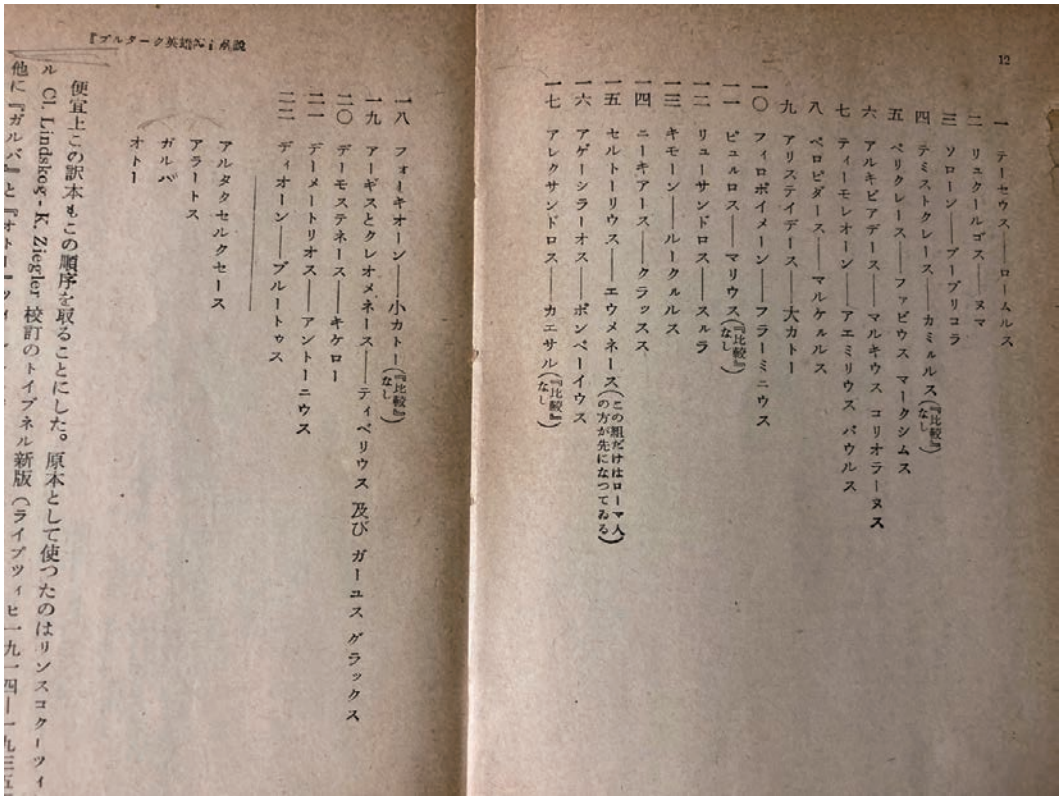
ΑΛΕΞΑΝΔΡΟΥ
καὶ
ΚΑΪΟΥ ΙΟΥΛΙΟΥ
ΚΑΙΣΑΡΟΣ.

ΑΛΕΞΑΝΔΡΟΣ.

ΤΟΝ Ἀλεξάνδρου τοῦ βασιλέως βίον, ⊂ 218
τοῦ Καίσαρος ὑφ' οὗ καταλυθὴν Πομπήϊος,
ἐν τούτῳ τῷ βιβλίῳ γράφοντες, διὰ τὸ
πλῆθος τῶν ὑποκειμένων πραγμάτων, οὐ-
δὲν ἄλλο προσερούμεθα, ἢ παραιτησόμεθα
τοὺς ἀναγινώσκοντας, ἐὰν μὴ πάντα, μηδὲ καθ' ἕκαστον
ἐξηρασμένως τῶν τοιούτων ἀπαγγέλλωμεν, ἀλλὰ δια-
τεμνοντες τὰ πλεῖστα, μὴ συκοφαντεῖν. οὔτε γὰρ ἱστορίας γρά-
φομεν, ἀλλὰ βίους· οὔτε τὰ δοξαστότατα πράξεσι πάν-
τως ἔνεστι δήλωσις ἀρετῆς ἢ κακίας, ἀλλὰ πρᾶγμα βρα-
χὺ πολλάκις καὶ ῥῆμα, καὶ παιδιά τις ἔμφασιν ἤθους ἐ-
ποίησεν μᾶλλον, ἢ μάχαι μυριόνεκροι, καὶ στρατοπέδων αἱ
μέγισται, καὶ πολιορκία πόλεων. ὡς τοίνυν οἱ ζωγράφοι τὰς
ὁμοιότητας ἀπὸ τοῦ προσώπου, καὶ τῶν περὶ τοῦ ὄψιν εἰδῶν,
οἷς ἐμφαίνεται τὸ ἦθος, ἀναλαμβάνουσιν, ἐλάχιστα τῶν λοι-
πῶν μερῶν φροντίζοντες· οὕτως ἡμῖν δοτέον εἰς τὰς ψυχῆς

Aa.ii.

図版２：Stephanus1572 年版第 2 部第 3 巻 p.1219「Alexandros」冒頭．成蹊大学図書館蔵本.



12

一　テーセウス――ロームルス
二　リュクールゴス――ヌマ
三　ソローン――プーブリコラ
四　テミストクレース――カミルルス（『比較』なし）
五　ペリクレース――ファビウス　マークシムス
六　アルキビアデース――マルキウス　コリオラーヌス
七　ティーモレオーン――アエミリウス　パウルス
八　ペロピダース――マルケルルス
九　アリステイデース――大カトー
一〇　フィロポイメーン――フラーミニウス
一一　ピュルロス――マリウス（『比較』なし）
一二　リューサンドロス――スルラ
一三　キモーン――ルークルルス
一四　ニーキアース――クラッスス
一五　セルトーリウス――エウメネース（この組だけはローマ人の方が先になつてゐる）
一六　アゲーシラーオス――ポンペーイウス
一七　アレクサンドロス――カエサル（『比較』なし）

『プルターク英雄傳』解説

一八　フォーキオーン――小カトー（『比較』なし）
一九　アーギスとクレオメネース――ティベリウス　及び　ガーユス　グラックス
二〇　デーモステネース――キケロー
二一　デーメートリオス――アントーニウス
二二　ディオーン――ブルートゥス

アルタクセルクセース
アラートス
ガルバ
オトー

便宜上この訳本もこの順序を取ることにした。原本として使つたのはリンスコクーツイル Cl. Lindskog - K. Ziegler 校訂のトイブネル新版（ライプツィヒ一九一四―一九三五）他に『ガルバ』と『オトー』

図版３：アルド 1519 年版による『英雄伝』登場人物一覧（作品番号１～22 組と４名）：
出典：河野與一譯『プルターク英雄傳（一）』（岩波文庫 昭和 27 年）p.12-13（部分）.